

書評・紹介

西村 嘉著『八戸の歴史』

稲 葉 克 夫

本書はサブ・タイトルに古代社会から産業都市までとあるように東奥の地が蝦夷として蔑視され、敵視・征服された古代史から、高度成長時代の申し子の新産都市として変貌をとげ、さらに列島改造・巨大開発のスローガンのもとに日本最後の工業開発地域ともてはやされたむつ小川原開発の問題点にまで触れた八戸通史である。

著者の西村氏は現在、市立八戸図書館長の職にあるが、長年にわたり、地域においてユニーク・卓抜な視点から地域史・地域文化にすばらしい発言をして来た。氏は本来は植物学徒である。したがってその視点は生態学的である。氏は八戸史をエコロジーの観点よりみた先駆者である。また戦争中、中国に召集され、軍政の仕事をしたが、この戦争体験も氏の史観を形成する大きな要素となっている。

さらに西村氏は、かの安藤昌益学徒の中の特異なりーダーである。「昌益学」が存在するとすれば、西村氏は陰の番長的存在である。昌益には、その著書の字句の解釈だけをもってしては理解しえない妖気がある。その神秘の扉を解くシャーマンが西村氏である。

氏はまず一つの項目を必ず一千字に抑えた。この技術は八戸地方史に余程通曉していないと出来ない技である。三百数十項目を全く自家菜籠中のものとして処理する巧みさはまさに名人芸の領域に属そう。

次に西村史学の最大の特色は、技術の視野から社会変動への独創的な見解をうち出すことである。近来、社会変化というと経済的ゆき詰まりとか、政治上の失敗とか、歴史的転換期とか、とかく巨視的に社会全般の動きから無限定で物事を説明することが多かった。それは地方史においては、その独善性をうち破るに効果的な手法でもあった。確かに日本中、ある時代になればどこにもそのような傾向・変動がおけると説明すれば、それだけの重み・説得力が生ずる。しかしその現象を各地域史にそのままあてはめてよいかの実証性を欠いたまゝ適応することも多かった。西村氏は科学の徒である。したがって視点は帰納的・実証的である。江戸・大阪の問題点をそのまゝ八戸にあてはめ、事大主義的権威によりかかって事象を説明することはしない。しかも地域の生活から問題をほりおこす。

戦後の一特色として、農村の窮乏などを、史家は農民の階層分化などを統計的にくどくどしく分析するが、西村史学は大豆栽培をとらえ、その焼畑栽培をとらえ、その焼畑栽培が在来の稗作の衰退、主食・飼料の不足をもたらし、農業の体質の脆弱化をもたらしたとする。新田開発の限界を用水や肥料の面からとらえ、乱開発が生態系を乱し、猪飢饉を生じた理由も説明する。元禄時代、東廻り航路が可能になった船体構造の説明も類書にないことである。

生活の面から歴史を具体的にとらえている場面が多いが、四十八頁の根城武士の生活の描写がすばらしい。素朴な中世武士としての八戸武士が、この描写はどリアリスティックにとらえられていることはこれまでになかった。

西村氏の眼光は鋭い。何気なしのデテイルからすばらしい歴史の鍵をとり出す。鰯の干し場争いから地域の商業経済の発展をさぐり、船奉行が浦奉行と改称する宝永四年辺りを八戸藩経済の発展期として位置づける。

また庶民の片言から人心の移ろい、ひいては歴史の変動をかぎとる氏の感覚のさえにはしばしば驚嘆する。弘化二年の八戸大火の際、藩の救済対策は時期を失して人々は感謝の言をはいかない。八戸の幕末世相を書きとどめていた大岡長兵衛は、その『たしなみ草』の中で、このことはお上の恵みが薄いのか、下々の心得違いか「其非弁へがたき時節也」と書いているのに着目し、「確実に変革のときが迫っている」と幕藩体制のしくみが人々の心から難れていくことを指摘する。

また古来、郷土史の類いには根拠不明な俗説的解釈がまことしやかに語り伝えられ、それなりの権威をもっていた。それは郷土史が藩士によって書かれることが多く、藩の秘事にまつわることは明らかにすることをタブー視していることに由来する。しかし西村氏は、この俗説の権威をきっぱり否定して実証性を重んずる。たとえば九代藩主信順が島津藩から八戸藩主として来たのは、信順の相撲好きが縁になったのだという有名な話を否定し、島津重豪の政略説を出

す。確かに盛岡藩主二男利剛の八戸藩養子という極めて自然な、既

に決した線を廃して、西南の雄島津家から養子を仰える事態は異様

で、陰に強力な圧力がなければ成り立つ筈のないことである。また

信順は俗説の相撲好きとはうらはらに抱相撲制度を廃している。

史料に乏しい古代の項目で、西村氏は「いっさい知るべきものがない」とか「こうした考え方を支持する積極的史料はない」の表現を多く用い、従来のほいまな臆断・推理で歴史を判断・解釈することを抑制している。しかもその仁佐平・都母についての考察や、戸・糠部についての独創的史論には耳を傾けさせる重味がある。

中世史の最大のヤマは南朝方として活躍した根城南部氏の活躍と、三戸南部氏の抬頭である。ここでも西村氏は重要な提言をする。それは本宗を名乗る三戸南部氏は、根城南部氏の女婿の出身ではないかということである。そのよりどころになった三戸南部氏の系図分析は見事な史眼といえよう。

近世の八戸藩史で目立つのは君臣のコンビの良さである。三代通信と船越治助、四代広信と紫波源之丞、八代信真と野村軍記、そして最後は信順と中里行蔵である。かゝる藩主・藩士の信頼関係は、八戸藩が小藩であったから成り立ちえたのだろうか。西村氏は別にこの点に触れないが、すぐれたリーダーが地域を統率するスタイルは今に至る八戸地域の特色ではなからうか。

近代史でも思わずハッとする指摘が多くなされている。たとえば明治における津軽地域の町村合併がスムーズに行かない理由に水利権問題をあげ、三戸郡にはそのような例がなく順調だったと

いうことや、現代農業の救世主的農法のトンネル式畑苗代が上北の山間部の開拓農家の発明だったとか、改めて教えられる面が多い。また明治四十四年の鯨騒動の際の権力者側の報告文に触れ、反対者をつねに「一部〇〇」と過少報告する習性は「反対者の言い分に耳をかそうともしない者の口から出る言葉である」と静かに抗議し、共同体のしきたりが、帝国憲法・教育勅語など官製の法と倫理、そして資本主義の論理の前に無力化され、弱い者は、ただ「無告の窮鬼」と化さねばならなかった怨念をのべる。

大正・昭和史は西村氏自身の歴史であるのでより具体的に、身近かな事例でもって歴史の真実に迫る。とくに戦後三〇年、モノの世界の確かな発展の強力さはそれとして評価するが、しかし石油危機以来の状況は、戦後日本繁栄の基本構造だった国際分業論の破産とみ、現代のわれわれは大いなる転機に立っていることを告げて本文を結んだ。

私は読み終えて早速にナシヨナリズムとインターナシヨナリズムとの問題を頭に浮かべたが、西村氏の云わんとしていることは、そんなことを観念的にあれこれ論ずる前に、自ら立っている土と水の問題、それは単にモノとしてあるのではなく、父祖の歴史の営為の文化遺産だということ、その土地に住む人間はまず自らを目的として考えよということだろう。その上での経済論理の展開であらねばならない。

西村氏はこの重味のあるすぐれた通史を廉価版にするため一切のゆとりを切り払ったが、このような書くこそ、多少高額になろうとも

紙質・装幀・図版などを高級化して書棚で君臨すべきものなのだと私は思った。(四六版 二七〇頁・八戸市伊吉書院発行、九八〇円)

(青森県立浪岡高校教諭)